

lay expert の大切さ

宮崎路子さん（大田原校）

村上陽一郎先生のご講義の内容をすべて理解できた訳ではありませんが、特にデカルトとヴィーコの「真」への考え方の違いは多少理解できました。真なるものだけを追求して、そうでないものを排除するデカルトと、真らしきものを捨てないというヴィーコの姿勢の違いです。「考える自己」だけは確実な真理として残ると辞書にありました。

真の可能性のあるものをどう立証するかという点で、直接医療とは関係のない、哲学者でいらっしゃる村上先生から narrative method もその一つの可能性であると同えてよかったです。データの数字が並んでいるとき、その連続体のところどころには、実際にはデータがないわけで、そこをあるものと見なして連続体にして科学的根拠としているが、実際は内挿や外挿という、必ずしも科学的でない見なし行為が行われているという事実を今まで気付きませんでした。massage という単語の新しい意味も学びました。

専門家と非専門家の間をつなぐ lay expert がどうしても必要だというご意見も納得しました。非専門家がただの素人のままでいるのではなく、知識や見識を身につけていき、expert として存在することの大切さを私も実感します。現実にも今、徐々にですが、さまざまな分野において、一人ひとりが黙っていないで、物を言う存在になりつつあるように思います。lay man でなく lay expert が増え、専門家との橋渡し役となって機能することによって、世の中は大きく変わるであろうと思います。なぜなら非専門家のほうがはるかに数が多いからです。

長年「物を言わぬ存在」であった私ですが、声を上げていくことの大切さを毎週この講義で学び、私自身の心に意識変革が起こっています。職場の会議でも「波風を立てないこと」を優先にして、常に大人しく振舞っていましたが、自分の意見を前面に出すようになっていきます。「学ぶ」という行為は人を変えますね。しかしながら真摯で地道な姿勢があってこそその「声」なのであって、努力を伴わない「声」では人は付いてこないなあとも思います。